

午後Ⅱ試験

全問に共通して、具体的で、経験に基づいていることをうかがわせる論述が多かった。また、問題文の引用で文字数を費やし、内容が薄くなってしまっている論述については昨年度から減少した。一方で、問題文に例示した項目を抜き出し、一般論と組み合わせて論述を構成する傾向については、昨年度と同様に多く見受けられた。問題文に記載した項目は事例として挙げたものであり、受験者は設問で求められていることを把握した上で、問題文中の事例にとらわれ過ぎることなく、実際の経験に基づいた具体的な論述をするよう、心掛けてほしい。

問 1（要求を実現する上での問題を解消するための業務部門への提案について）は、多くの解答が、経験を踏まえ、設問に沿って具体的に論述をしていた。本問では、要件定義における問題の解消をシステムアーキテクトとして論述することを求めた。しかし、要件定義ではなく、設計段階やテストにおける問題に関する論述や、解消策が体制面や期間調整などプロジェクトマネジメントの側面からの論述なども散見された。

問 2（設計内容の説明責任について）では、設計した内容を、関係者に対して、どのような観点から説明したのかについて、自らの経験に沿って論述することを期待した。この意図を理解して選択した受験者は、適切な論述をしていた。ただ、“説明した内容”と“説明の観点”の違いを理解できずに選択したと思われる受験者も多く、この場合は設計項目を羅列した論述や設計過程を述べただけの論述になっていた。この意味で、全体では題意に沿った論述と、そうでない論述に二極化しており、後者が多かった。

システム開発においては、関係者が多くなることは必至である。このため、関係者に期待する役割を果たしてもらえよう、観点を明確にして設計内容を説明する能力がシステムアーキテクトには必要とされる。この能力の重要性を理解し、実践してほしい。

問 3（組込みシステムの開発における信頼性設計について）では、おおむね組込みシステムの開発経験を具体的に論述できていた。しかし、その内容は、信頼性設計に対する十分な知見をうかがわせる論述がある一方、明らかな知識不足と思われるものもあり、二極化していた。また、各設問において、複数の項目について論述を求めているにもかかわらず、その一部の項目に対してしか論述していないものが散見された。評価についての考察については、多くは具体的、定量的に論述されていた。それに加え、複数の視点から論述されているものなどもあり、高く評価できるものが多かった。